

寄

稿

在米生活二十一年を終えて

—野茂英雄投手が活躍していた

ポスドク時代から終身雇用まで



平成二年卒
角^つ田^だ郁^{いく}生^お

私の経歴を一口に申せば、「一九九〇年（平成

二年）に東北大学医学部を卒業後、同大学院で

一九九四年に学位を取得し助手を一年務め、

一九九五年から二〇一六年まで二一年間米国留

学、この間、博士研究員からスタートし、独立後

にテニユア（終身雇用）を取得。二〇一六年四月

に帰国し近畿大学教授に就任し現在にいたる。」

といったことになります。あたかもプランした

キャリアのように思われる方もありますが実情は

異なるものでした。

私の父、角田文男は岩手医科大学衛生学・公衆

衛生学の教授を勤めておりました（東北大学医学

部でも衛生学非常勤講師）。一方、早逝した母則

子は盛岡市で「西松園内科医院」というクリニッ

クを開業しておりましたが、両親の仕事ぶりを見

ておりますと、国際学会などで海外に行く父親の

基礎医学というものが、母親の臨床医学より魅力

的に映りました。そのようなわけで東北大を卒業

した時は病態神経学（神経病理学）講座の岩崎祐三教授の大学院生となり基礎研究の生活に入りました。大学院在学中は国内留学という形で、福島県立医科大学神経内科学講座山本悌司教授のもとで臨床に接する機会がありました。当時は「岩崎教授の下で神経病理学の研究を続け、途中二、三年の留学をさせてもらい、教授が退官するところにはポジションを見つけれらるだろう」という極めて保守的な将来像を描いておりました。

この青写真が壊れたのは学位取得後、助手（現在の助教）になって一年もたたない頃のことです。岩崎教授は「俺は教授を辞めて宮城病院の院長になる。お前ら俺が辞めたら電気代も払えねえぞ」と突然宣言されました。国際的に活動されていた岩崎教授でしたので、私は「学位を取得し助手も一年勤めさせていただきましたので、留学を考えたいのですが」と申し上げ、留学先の推薦をお願いしたのですが、岩崎教授曰く「あ、そう、手紙でも書いたら」との一言だけで推薦はいただけず、途方にくれてしまいました。

この時点で、私の学位論文はまだ科学雑誌に受

理されておらず業績がございませんでしたので、私が推薦状もなく、海外の研究室に手紙を書いて、どこからも返事は来ませんでした。当時は、助手を休職し給与の一部を受け取りながら留学することが可能でありましたが、申し込んだ留学先は「無給でも雇わない」との返事でした。このような状況で救いの手を差し伸べていただいたのが、私が日本神経病理学会で発表した際に一度だけ座長をしていた山田正仁先生（当時は東京医科歯科大学所属、現在は金沢大学神経内科教授）でした。山田先生からは御自身が以前留学されていたロバートSフジナミ教授を紹介していただき、米国ソルトレイクシティのユタ大学医学部神経内科学講座にポスドク（博士研究員）として採用が決まりました。後でわかったことですが、フジナミ教授はポスドクの採用にあたっては信頼できる人物からの推薦をもっとも重要視しておりました。業績のない私が採用されたのも、こうした背景だったのです。

ユタ大学には一四年おりましたが、この間、神経内科学講座でポスドクを四年勤めた後、*Neuro*

search Associate (日本の助教相当) となり、福利厚生がつくなど表向き待遇はよくなりました。しかし、アメリカの給与のシステムでは就労年数に応じて給料が上がっていきますので、Research Associate は三年やりましたが、ポストドクの期間と合わせて合計七年も同じ職場におりますと給料は約一・五倍になりました。この意味するところは、この時点ではまだフジナミ研究室の教室員でありましたので、他のポストドクの二倍の働きをしない限りにおいては首を切られる立場になったというわけです。

ちなみに私が留学した一九九五年は野茂英雄投手がメジャーリーグに日本人としては、事実上はじめてロサンゼルス・ドジャースに入団し活躍をはじめた年です。日本でもエースであった野茂投手は日本を捨てて、業績のない私は日本に捨てられ、渡米したという違いはありますが、背水の陣で臨まないといけないという立場は同じでありました。自分と野茂投手を重ね合わせることで、野茂投手に勇気をもらい支えられておりました。当時、ユタ州ではドジャースの試合結果を知るた

めには、深夜のスポーツニュースを見るしかなかったのですが、ニュースの時間にはひとりテレビの前に正座をして、祈るような気持ちで野茂投手の試合結果を見ていたものです。野茂投手はドジャースで三年間活躍したにも関わらず、クビになつてニューヨーク・メッツに移籍となりましたが、これは三年間で彼の給料が上がってしまい、それに見合う働きが野茂投手に望めないと球団が判断したためです(入団時は野茂投手はアメリカでの実績がないのでタダ同然の給料でした)。この時に、私は「アメリカの研究者のポストドクは野球選手と同じで、複数年契約をしてもええず、毎年クビになるのを怖れながら仕事をする。成功しても、給料がひとたび上がると、下がることはないので、給料に見合った業績をあげないとクビをきられる」と実感したものです。

それではアメリカで医学研究をやっていく上で、上司にクビにされないためにはどうすればよいのかといいますと、研究者の場合、独立して Principal Investigator (PI、主任研究員) になればよいのです。PI は Lecturer (講師) からはじ

けり、Assistant Professor、Associate Professor、Professorとランクがあり、これらの教授陣はFacultyと呼ばれ講座のFaculty Meeting（教授会）に参加することが出来ます。一方Facultyに雇われている人物はStaffといい、これには秘書、テクニシャン、ポスドク、Research Associateが含まれます。Lecturerのうちは大ボスについて給料などのサポートを受けることが多いですが、Assistant Professorからは、ほぼ完全独立となる傾向にあります。

私は二〇〇二年からLecturer、二〇〇五年からはAssistant Professorになりましたが、これで安心かというところではなく、今度は自分で自分の給料を確保しなくてはなりません。大学が給料を保障するのは終身雇用（多くはAssociate Professorから）になってからなので、Junior Facultyと呼ばれるAssistant Professorまでの教員は研究費が切れば多くは失職することになります。私は二〇〇九年までユタ大学医学部神経内科学講座と病理学講座でAssistant Professorを勤めておりました。ユタ州には一四年おりましたので、この間

に多くの日本人医師・研究者の留学のお世話をし、留学終了後は見送るということをいたしました。自分が留学した当初は右も左もわからない赤ん坊同然であったのが、数年経ち、ポスドクとして留学してきて来られた先生方の御世話をできる立場になった時点では感慨がありました。そうした日本人ポスドクの中に、近畿大学医学部神経内科学講座の西郷和真先生（現准教授）がおり、近畿大学と私の縁が始まり後に近畿大学でポジションを獲得することになりました。東北大学と切れていた縁も、東北大学医学部免疫学講座から私のユタ大学の研究室に当時医学部二年生であった山地玲奈先生（現、スイスWHO勤務）が二三か月の基礎修練で来られたことなどがきっかけで、繋がりができるようになってまいりました。

米国の医学部で職員のポジションは三つのトラックに分かれます。臨床が中心のクリニカル・トラック、研究のみのリサーチ・トラック、研究と教育のテニユア・トラックです。この三つのうち自分の研究費がなくなった時に大学が給料のサポートをするのは終身雇用になる可能性のあるテ

ニュー・トラックのみです。私はユタ在住のうち
はリサーチ・トラックでしたから自分で取得した
研究費のかなりの部分を自分の給料を支払うのに
使っておりましたが、大変不安定なポジションで
ですので、テニユア・トラックを目指すことにいた
しました。アメリカの研究費は長いもので五年あ
りますが、当時、私は自分の研究費が残り二年弱
で終わってしまうという時期に職探しをはじめま
した。

職探しは、アメリカ・カナダ・ヨーロッパのみ
ならず、中国や日本にも求めましたが、わざわざ
中国まで出かけて行って、既に雇わないことが決
まっていることを知らされたり（航空券は片道の
み支払ってもらいました）、日本まで教授選挙の
最終候補の一人として招待されて（アメリカから
の旅費の支給はなし）実は当て馬に使われていた
ことがわかったりと、平坦な道ではありませんで
した。複数申し込んだ中で、私がNIHの研究費
を取得していたことなどが評価されて、インタ
ビューを重ねた上で、ルイジアナ州立大学医学部
微生物学・免疫学講座でテニユア・トラックの

Assistant Professor として雇われたのが二〇〇九
年であります。

紙面の都合から、ルイジアナでテニユアを取得
した経緯は省略させていただきますが、移籍後六
年の二〇一五年に Associate Professor となり終身
雇用となりました。それから一年以内で、近畿大
学医学部微生物学講座の教授として赴任すること
になり、ルイジアナでの七年間の教育・研究生活
を終えました。日本に帰国してから二年以上が経
ちましたが、これまで、まるで二度目の留学をし
ているかのような「異文化」体験をしており、在
米二一年の間に、日本も私も変わったことを、未
だに日々感じております。

在米生活二一年を終えて

—野茂英雄投手が活躍していた

ポストドク時代から終身雇用まで

平成二年卒

角つの
田だ
郁いく
生お